

眼鏡な後輩と氷の狙撃 手

キラ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

高校生活最後の冬を過ごしていた少年は、VRMMO『ガンゲイル・オンライン』の
世界でひとりの女性プレイヤーと出会う。

それとほぼ同時期に、彼は現実世界でひとりの少女と出会う。

クールなスナイパーと寡黙な後輩。2つの存在がつながり合うことを知らぬまま、少
年は2つの世界で彼女との関わりを深めていく。
「先輩って、変わつてますね」

目 次

ありふれた出会い／突然の出会い

1

彼女の名前は朝田詩乃／彼女の名前はシン

ノンさん

14

ありふれた出会い／突然の出会い

『生きてる？』

それは、一種の一目惚れ、というやつだつたのかもしれない。

『ここ、結構強いモンスターが出るから。初心者は来ない方がいいよ』

たまたまログインしたVRMMOゲーム『ガンゲイル・オンライン』——通称GGO の中で、俺はひとりの女性プレイヤーと出会った。

銃と鋼鉄の世界であるGGOでは、そもそも異性のプレイヤーというだけで興味を惹く存在である。

加えて、彼女の立ち居振る舞い、纏う空気が俺の心に強烈な印象を残した。

髪は水色のショートヘア。瞳は藍色。濃い緑色のジャケットと、首に巻いたマフラーが特徴的だった。

クールな外見そのままで、口調も戦いぶりも冷静そのもの。しかも相当な実力者といったもんだ。後日開催されたGGO内でのトーナメント『バレットオブバレット』にも彼女は参加しており、俺もネット中継でその勇姿を見届けた。途中親に呼ばれて何度か席を外したために全部を見ていたわけじゃないが、素直にかつこよすぎるとの感想を

抱いたのは事実だ。同着とはいえ優勝しちゃうんだから本当にすごい。

そういうことがあって、俺はその人——『シノン』というプレイヤーに惚れこんだ。惚れたと言つても、付き合いたいとか結婚したいとか、そういうアレではない。彼女はあくまでゲーム上でのキャラクターであり、現実世界でそれを動かしているのは見知らぬ女性なのだから。

ただ、仮想世界に存在するシノンという人間に、憧れの感情を抱いたというだけだ。

*

「……出遅れた」

すでに満席になつている学食のテーブルを眺めながら、俺——光原誠は小さくため息をついた。

日本史の授業が長引いたせいで、他のクラスの生徒よりもここに来るまでに時間がかかつたのが原因だ。どーせ次昼休みだからちよつとくらい延長してもいいでしょ？ という先生方の考えには断固反対したい。もともと3年の教室は学食から1番遠いんだから。

「おばちゃん。前から言つてるけど、そろそろ食堂の席増やしましょよう」

「そんなこと下つ端のあたしに言われてもねえ。もつと偉い人に頼んでおくれ」味噌ラーメンの食券を渡すついでに食堂のおばちゃんに直訴してみるも、あっさり流されてしまった。

「冬の間だけでいいから、どうにかならないかなあ」

「寒いもんねえ、今の季節は」

先ほど満席と言つたが、正確には食堂内部の席がいっぱいという意味である。屋外に用意されているテーブルについては、ここから見えるだけでもちらほらと空席が残つてゐる。

が、今は12月半ばの冬真っ盛りの時期。できれば外で吃るのは遠慮願いたい。

「ほら、寒い分はあつたかいラーメンで我慢しなさい。汁多めにしといたから」

「汁じやなくて麺を増やしてくれたらもつとうれしいです」

「だつたら最初から大盛り頼みなよ」

もつともな意見をもらいつつ、おばちゃんから味噌ラーメンを受け取る。

「今日は友達と一緒にやないのかい？」

「2人とも休みです。同時に風邪ひいたみたいで」

「あら。それじゃ仲間外れだね」

「だからって体調崩したくはないんですけどね」

「あはは、その通りだね」

笑うおばちゃんに軽く礼をして、外に見える空いたテーブルへと足を進める。
……あの人、俺が入学した時からずっといるんだよな。もうすぐお別れかと思うと
ちょっと寂しい。

「さぶつ」

思わず声に出てしまうくらいの寒さを耐え、白いテーブルにお盆を置いて白い椅子に
腰を下ろす。早くラーメン食べて温まろう。

「いただきます」

両手を合わせてから麺を一口。うん、熱さが身体の芯まで染みわたつてくる。

余裕ができたので、味噌ラーメンを味わいながら周囲の景色をぐるりと見まわしてみ
た。

友達としやべりながら食べている人もいれば、俺と同じくひとりで食事を楽しむ人も
いる。

こうして見ると、やっぱり単独で飯を食つている連中は男が多い。女子は誰かと一緒に
にいたがる人が多いというのは事実らしい。

「どうぞさまつと」

他のテーブルや中庭を眺めて口を動かしているうちに、いつの間にか器の中身が空に

なっていた。もう全部食べ終えてしまったようだ。

ちょっと物足りないが、まあ夕飯まで持つだろう。

「あと20分か」

昼休み終了まで何をしようかと考えていると、ふと近くの席の女子生徒の姿が目に留まつた。

先ほど見つけた、数少ない女子でひとり飯を食べていた人だが……いつの間にか、テーブルに突つ伏して眠つてしまつていた。

で、それを見ていた俺もなんだか眠くなつてきた。

相変わらず外は寒いっちゃ寒いが、ラーメンで温まつた今の状態なら耐えられないほどではない。

教室に戻る前に、一休みしよう。そう考えた俺は、その女子にならつて顔を伏せた。

*

予鈴が鳴つた。5時間目が始まるまで、あと5分。だといふのに、いまだに件の女子は目を覚まさない。

「んー……」

これ、声かけた方がいいのか？ 後ろ姿に見覚えがないから、多分下級生には違いないんだが。

眠りが深くて予鈴が聞こえなかつたのか、それとも単純に授業をサボる気なのか。後者の場合、彼女はサボリ常連の不良の可能性が出てくる。『ああん？』とか言われて睨まれたりしたら怖い。

「なんて、考え過ぎか」

ただ寝過ぎしてるだけなら声をかけないとかわいそうだし、さつさと起こしてあげよう。

「おーい」

近づいて、呼びかけながらテーブルをトントンと軽く叩く。

声か振動のどちらかが伝わったのか、彼女の体がぴくっと震えた。

「……ん んん」

「寝起きのところ悪いんだけど、あと4分で授業始まるよ」

「ん？ ……つ！」

状況を理解したのか、寝ぼけ眼が一気に開かれた。明らかに焦っている。

「す、すみません！ ええと、ありがとうございます」

「いや、気にしなくていいよ。それより急いだ方がいいんじゃないかな」

「は、はい」

テーブルに置いてあつた眼鏡をかけ直し、うなずく彼女。続いてどんぶりの容器が乗つたお盆を手に持ち、

「失礼します」

小さく礼をしてから足早に去つて行つた。

彼女が食堂を出たところで、時計を確認。

「あと3分。まあ、間に合うだろ」

結局、不良じやなかつたな。顔見たら普通におとなしそうな子だつたし。

長くない黒髪が、よく似合つていた。

「俺もぼちぼち行くか」

俺はそんなに急ぐ必要はない。次の授業は古典だが、あの先生は毎度数分遅れて教室にやつて来るからだ。

何事も、手を抜けるところで抜くのが賢いやり方である。

*

「ただいま」

学校が終わって帰宅した俺は、そのまま2階の自分の部屋へ直行。鞄を置いて部屋着に着替え、ベッドに置きっぱなしにしていたアミューズファイアを手に取った。

「今日はALOにするか」

VRMMO。まるで自分が本当にゲームの中の世界にいるかのように感じられるという、まさに画期的な技術の結晶。これが一般人の手の届く値段で普通に利用できるなんて、10年前とかじや到底考えられないことだった。

とある事件の影響で人気は下火になりかけたのだが、最近はぐんぐんとVRゲームをプレイする層が増えてきているらしい。その人気回復の理由は、なんかすごいデータが無償で配布されたからだと聞いた。やる気があれば誰でも仮想世界を作れるとか、そういうレベルですごいのである。

そして、そのVRMMOゲームの世界に入るために必要なのが、このアミューズファイア。これにやりたいゲームのROMカードを挿し込んで、頭につけてリンクスタートと言えばいい。

「1時間半か。何しようかな」

ベッドに寝転んで、暖房を微風設定でスイッチオン。

現在時刻は5時半を少しまわったあたり。とりあえず、夕飯ができるであろう7時ま

でのプレイだ。

何をするかは、向こうに行つてから考えるにしよう。

「リンク・スタート」

*

アルヴヘイム・オンライン。

妖精やモンスターが暮らす世界、という設定で作られたこのゲームは、VRMMO—RPGの中でも特に人気を誇る作品のひとつだ。

プレイヤーは妖精となつて、自由に空を飛べるというのが最大の売りで、俺もそこに惹かれて小遣いはたいて購入したわけである。

「さて」

ほどなくしてケットシー領地の首都《フリーリア》に降り立つた俺は、夕飯までにすべき目標を決めることにした。

「お、レイじyan。今日もまたのんびりふわふわプレイしに来たの?」

ぶらぶら歩きながら思案に暮れていると、見知った顔に出くわした。

俺と同じケットシーの女性プレイヤー《エンジユ》だ。誰にでも気さくに話しかけ

るタイプで、俺も数回一緒にクエストに出かけたことがある。

で、『レイ』というのは俺のALOでのキャラクター名である。由来は、名字の光原の『光』→『光線』→『Ray』。まあたいていして捻つてもいい。

「いや、今日は他のことやろうかと思つて。そうだ、たまには領地のために働くのもありかな」

「え、マジで？ ニートのレイが働くの？ 何かの災厄の前兆かしら。突然浮遊城が落ちてくるとか」

「なんだよその言い方。やつとリアルの方が暇になつたから、これからはまた前みたいにいろいろやつてみようつてだけなのに」

「ふーん、そういうこと。なら、今度仲間とクエスト行くから付き合いなさいよ。結構レアなアイテムが手に入るらしいから」

この辺のフットワークの軽さはさすがと言つた感じか。俺としても、誘つてもらえるのはありがたい。

「今度つていつ？」

「4日後の夜ね。どうかしら」

今日が12月17日の水曜日だから、4日後は日曜日か。

「ああ、大丈夫だ。参加させてもらうよ」

「よしきた」

ぐつと親指を立てて喜びを表すエンジュ。ちょうどもうひとりくらいメンバーが必要だつたとのことだ。

その後詳しい予定を聞いて、彼女と手を振つて別れた。

「日曜にやることは埋まつたけど、肝心の今はどうしよう」

働くといつても、すぐに仕事が転がり込んでくるわけでもないし。

あと1時間半じや、ちょっと中途半端だ。

……とりあえず、気分転換に空を飛びながら考えるか。

「うん」

ひとりうなずき、街の外に出る。ちょっと離れたあたりに何もない草原があり、気軽に飛行するにはもつてこいのスポットなのだ。

「ふいー」

背中の羽根を広げて、ふわりと空中に浮かび上がる。そのまま横になつて、俺はぶかぶかと浮きながら風を感じるだけの作業に入つた。

こうしてその場に留まつてリラックスするのが、ここ最近の俺のマイブーム。目を閉じて心を落ち着け、仮想世界のものとはいえ精巧に作り上げられた自然をめいっぱい味わうのが、なんとなく好きなのだ。

「7時までずっとこうしてようかなー」

なんて気分になつてしまふが、それだといつもと同じである。でも、別に無理して違うことをする必要もないような。

「うーん」

まともらない考えを頭の中でぐるぐるさせていた、ちょうどその時だつた。

「あっ——！」

どこから女人の声が聞こえたので、反射的に目を開く。
……だが、すでに遅かつた。

「いつ……!?」

こちらに向かつて、猛スピードで飛んでくる女性プレイヤー。
回避する余裕は、ない。

俺にできたのは、声にならない叫びをあげることのみ。
「へぶつ！」

正面衝突した俺達は、そのまま地面へまつさかさま。

低空飛行だつたのが、不幸中の幸いか。

「痛つ……」、ごめんなさい。飛行の練習をしていたら、速度の調整を間違えてしまつ

て」

上半身を起こした彼女の姿を、改めて観察する。

水色の髪と、頭の上から生えた猫耳。加えて、お尻から伸びたしつぽの一部が見え隠れしている。

「いや、ミスは誰にでもあるから気にしなくていいよ」

「……ありがとう。なかなか感覚がつかめなくて」

本日2人目となる、ケットシーの女性との会話だった。

彼女の名前は朝田詩乃／彼女の名前はシノンさん

「じゃあ、今日初めてALOにダイブしたんだ」

「ええ、さつき登録を済ませたばかり。VRゲーム自体はやっていたんだけど、羽根を使うのは初めてだから……」

「飛べるっていうのはALO独自のシステムだからなあ。最初はみんな要領がつかめなくて戸惑うところなんだ」

ケットシーの少女と話しながら、昔の自分の醜態を思い出す。補助コントローラなしで飛べるようになるまでに、いったい何度も体に傷を負つただろう。

よっぽどセンスがいい人とかは、一瞬のうちにマスターしてしまうらしいけど。

「さつきの君のミス、俺も昔やらかしたことがある。しかもめっちゃいかついサラマンダーにぶつかっちゃってさ」

なんだか懐かしくなってきた。

「よかつたら、コツ教えようか？　といつても感覚とかは人それぞれだから、俺のアドバイスが役に立つかはわからないけど」

「……いいの？」

「暇で何しようか考えてたところだつたから。ちようどいいよ」

などと、ノリで軽く提案してしまつてから気づく。

……ちょっとこれ、ナンパっぽいな。

暇なんだよねー、とか言いながら馴れ馴れしく男が女に近づこうとするのは、現実でもゲーム上でも胡散臭いものなのだ——というのは、エンジユからの受け売り。

「え、えっと！ ナンパじゃないからね！ ナンパじや」

慌てて念押しをしたところ、彼女はきょとんと俺を見つめて……それから、口元にかすかな微笑を浮かべた。

「確かに、ナンパするつもりならもつとうまくやるでしょ？」

「……なんか引っかかる言い方だけど、信じてもらえた？」

「あなたは善意で私を手伝ってくれる。そうでしょ？」

結構気が強いというか、堂々としているタイプなのだろうか。

冗談交じりに、彼女は俺の言葉にうなずいた。

「お言葉に甘えて、少しご教授いただこうかしら」

「わかつた、それじゃ早速始めよう。さつきは補助コントローラ使つてたんだよね」

「ええ。想像以上にスピードが出ちゃつたけど」

「ケットシーはもともと俊敏だから、他の種族以上に速度調節には気をつけなくちゃい

けないんだ』

素早い。視力がいい。モンスターのテイムが得意。この辺がケットシーの特徴だ。

「あなたもケットシー、よね」

「そうだよ』

俺の頭についた猫耳を眺めて尋ねる少女に対し、肯定の返事をする。

仮想世界での俺の分身であるレイのアバターは、黒髪で中肉中背な体格だ。これに黒の猫耳としつぽがくつづいている。一般的に男性プレイヤーの猫耳は小さく、俺の耳も少女のそれに比べると控えめなサイズだ。

「とりあえず、宙に浮いてみようか』

俺の言葉にうなずき、彼女は左手にステイツク状のコントローラを出現させる。

若干緊張しているようにも見えたが、すぐに慣れるだろう。空を飛ぶのは楽しいだろうから。

*
*
*

「おー、うまいうまい』

途中俺の夕食による中断を挟んで、現在の時刻は午後8時半。

コントローラを使って飛んでいた彼女は、今やそれなしで空に浮かぶことができるようになつていた。

「ふう」

小さく息をついて、草原に足をつける少女。自由に飛び回るにはまだコントローラが必要だらうけど、それでも十分な進歩だ。

「飲みこみ早いね。俺よりもずっとセンスあるよ」

「そう？　まだまだこれからだから、判断するには早いと思うけど」

素つ気ない返事ではあつたけど、褒められてまんざらでもない様子。きっと飛行が上達してうれしいんだろう。

「ずいぶん熱中しちやつた。本当はもつと早く切り上げるつもりだつたのに」

「あ、ひよつとして俺のせい？　だつたらごめん」

「ううん、あなたのせいじゃないわ。だから気にしないで」

俺も正直、ちよつと時間を忘れてた。人にものを教えるつていうのはなかなかないとだから、つい力を入れすぎたのかもしれない。

「ここまできたら、早めに随意飛行もマスターしたいかな。コントローラ片手だと、この世界観にミスマッチだし」

「はは、確かにそれは言えてるかも。そういうえば、どうしてこのゲームを始めようと思つ

たの？」

「ALOをやつてる知り合いに誘われて、興味が湧いたから。今日は向こうの都合が合わなかつたから、とりあえずひとりで来てみたんだけど」

「なるほど」

俺と同じパターンだ。こうやつてオンラインゲームの輪が広がっていくんだなーと再認識。

「もう何日か秘密で練習して、ここで初めて会つた時には自由に飛べる姿を見せて驚かせるつていうのもありね」

「そつか。なら明日も手伝おうか？　今日ほどがつづり付き合うわけじゃないけどさ」

昔の自分を思い出して、気づけばそんなことを申し出していた。

ちよつと図々しいかもしれないが、断られたら素直に引き下がればいい話だ。

「かまわないの？」

「忙しいわけでもないしね」

「それなら、お願ひしようかな。あなたの説明、わかりやすいし」

俺の不安は杞憂だとばかりに、彼女は快くうなずいてくれた。

こういう風に積極的に働きかけたことつて、ゲーム上じやあんまりないんだよな。だから拒否されなくて内心ほつとしている。

「よろしく。ええと……」

「あ、そういえば名前言つてなかつたつけ。俺はレイ。ALOプレイヤーとしてはぼちぼちつてところかな」

「レイね。私はシノン。さつき言つた通り、初心者よ^{ニユービー}」

「シノンか。うん、よろし……く？」

シノン？

それつて……いや待て、偶然同じ名前を使つているだけの可能性がある。

「どうかしたの？」

「ああ、えっと。シノンつてさ、GGOとかやつてたりする？」

「GGO？ ええ、やつてるけど……」

「じゃ、じゃあやっぱり、あのB.O.Bで優勝した!?」

「あー……そうね。同じキャラネーム使つてると、すぐばれるか」

　彼女がきまりの悪そうな顔で首を縦に振った瞬間、俺は運命というものを人生で初めて感じたのだった。

「俺シノンさんのファンなんです！　まさかALOで偶然会えるなんて……よろしくお願ひします！」

「は、はあ……というか、どうして急に敬語？」

「だつて俺、シノンさんに憧れてるんで。一度だけGGOで会ったことがあるんですけど、覚えてないですよね。あの時は名前も言わなかつたし、アバターも似てないし」

居住まいを正して向き直る。緊張と興奮でテンションがおかしなことになつているのが自覚できたが、感情のままに口が動くのは止められなかつた。

「よく見たら、シノンさんのアバターは向こうのと似ていますね。髪の色も同じだし」「そ、そうね。アバターはランダム形成だから、偶然似たみたい」

アバターをいじるには追加で課金をしなければならないので、基本的には最初に与えられた外見で我慢する人が多い。俺もそんな多数派のひとりで、GGOではガチムチマツチヨマンの姿のままでいる。あの見てくれで弱いのつて恥ずかしいんだよなあ。

「憧れるのはいいんだけど、ここではあなたの方が先輩なんだから、ちゃんとした指導を頼むわよ」

「もちろんわかっていますよ。役に立てるよう頑張ります」

もともと真面目にやるつもりだつたけど、俄然やる気が出てきた。

幸運にもシノンさんと関係が持てたんだから、しつかりサポートしないとな。

*

12月18日。冬の寒さが厳しい中、今日も高校へ続く道をひとり歩く。周囲には同じ学校の生徒もいるが、友人らしい友人もいない詩乃に話しかけてくる者はいない。

「ふわあ……」

寝不足な体を引きずっている分、彼女はいつも以上にけだるさを感じていた。

週末のB・Bから一昨日まで、いろいろなことがありすぎた。キリトとの邂逅、『死銃』との戦い、新川恭二との別れ——そして、朝田詩乃という人間が守った命との出会い。

彼女にとつて大きな影響を与えた出来事の連続によつて、当たり前だが見えない疲れがたまつていただらしい。昨日は昼休みにうたた寝をしてしまい、危うく午後の授業に遅れるところだった。

そういうわけで、昨夜は早めに眠ろうと考えていたのだが……初めてプレイするゲームに、ついのめりこみ過ぎてしまつた。

「レイ、か」

成り行きで飛行練習のコーチをしてくれることになつた男性プレイヤー。どうやらGGOでのシノンを尊敬しているらしく、途中からえらく熱い視線を向けられた。

いきなり仲良し過ぎたかも、と思わなくもない。ただ、強くなることを求めて戦い続けるGGOとは違い、詩乃はALOでは楽しむことを重視してプレイしようと決めて

いたので、多少の馴れ合いも別にアリだろう。
できればキリストよりもうまく飛べるようになつて、彼の驚く顔でも揉んでみたいものだ。

まあ、あの変態センスの持ち主を超えるのは早々簡単ではないだろうが。

「おはよう」

「えっ？」

突然、背後から男の声が飛んできた。クラスメイトの女子ならともかく、異性からあいさつされることなど予想していなかつた詩乃是、思わず素つ頓狂な声をあげてしまふ。

「あー、ごめん。驚かせちゃつた？」

振り向くと、どこかで見た覚えのある男子生徒が申し訳なさそうな顔でこちらを見ていた。

「えっと……確か、昨日の」

「そうそう。覚えててくれたか」

予鈴でも目が覚めず、食堂のテーブルに突つ伏したままだつた詩乃を起こしてくれた人。あの時は焦つていたのでうろ覚えだが、記憶にある顔と眼前の彼の顔は一致している。

「昨日は、ありがとうございました」

「いえいえ。ちゃんと授業には間に合つた?」

「はい。ギリギリ、でしたけど」

「ならよかつた」

そう言つて気さくに笑う男子生徒。

背が高いし、上級生だろうか……などと考えていると、冷たい風が急に勢いを増して吹きつけてきた。

「おー、さぶさぶつ。今日も寒いな」

「あ、はい。そうですね」

ほとんど初対面に近い相手の詩乃に対し、彼は積極的に話しかけてくる。朝から元気な人だな、なんて感想を彼女は抱いた。

「冬は布団から出るのが本当に苦痛でさ。君は……そういうば、まだ名前聞いてなかつたな」

「……」

胸の奥がきゅつと引き締められる感覚。

やはり、彼は自分が会話をしている相手が何者かを知らなかつたらしい。

朝田詩乃という名前と、その生徒が過去に何をしたのか。これを知らない人間は学校

の中にはいないと言えるくらいだが、外見まで覚えている者となると少し割合が減る。

「俺は3年の光原誠。君は？」

今ここで名前を告げたら、どうなつてしまふのだろうか。

奇異の視線や怯える反応にはいい加減慣れていたが、それでも気持ちの良いものではない。

「あれ、どうかした？」

「……いえ。私は、1年の朝田です。朝田詩乃」

とはいえ、隠していられる内容でもない。

嫌われるなら早いうちがいいと考え、詩乃是自分の名前を口にした。

「朝田詩乃？」もしかして、一時期噂になつてた？」

「はい」

「そうなんだ。じやあ朝田、これからよろしく」

一度うなずいて、彼——光原誠は軽い調子でそう言い放つた。

「……え。それだけ、ですか」

「それだけって、何が」

「その、気にしないんですか。私の噂」

朝田詩乃是、人殺し。

遠藤達は、ある程度の証拠とともにこの情報を広めた。だから、その噂を信じない者はほとんどいなかつたはず。

「昔の話なんだろう？　しかも正当防衛だつたらしいし。いちいちそんなこと気にして怖がつてたら、今の世の中生きていけないよ」

「そ、そうなんですか？」

「少なくとも、俺はそう思つてるけど。だいたい、3年の他の連中もあんまり気にしないし」

……なんだか、さらつと衝撃的な発言をされたような気がする。

「あの」

「じゃあ俺、こっちだから」

親指で右方向を示す光原。気づけば、詩乃達はすでに校門をくぐつて校舎の玄関前まで来ていた。

「今日は眠りすぎないようにな。朝田」

「は、はい」

詩乃の返事を聞くと、彼は軽く手を挙げて3年の下駄箱へ歩いて行つた。
結局、大事なことは聞きそびれてしまつた。

「……」

しばらく立ち止まっていた詩乃だが、やがて自らのクラスの下駄箱へ向けて足を動かし始めた。

……『いろいろなこと』は、まだ終わっていないのかかもしれない。